

貝塚の自然を尋ねる 2 近木川河口

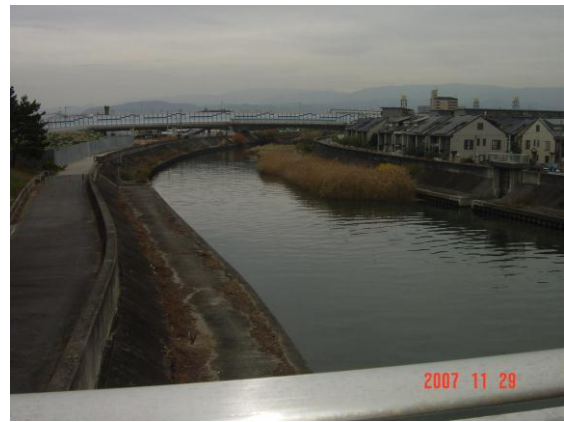
川村 甚吉(貝塚市立自然遊学館)

今回とり上げますのは「近木川河口」です。葛城山に端を発した近木川は最終二色の浜にたどり着きます。20 キロメートルの長旅です。

その長旅は時には最悪の結果も招きます。平成5年、平成9年には全国の二級河川でその汚れが第一だと報告されました。蕎原や木積の畑地区などを見ますとすごくきれいな流れです。そのきれいな水は河口に達すると次第に汚れてしまうのです。しかし、近木川を取り巻く貝塚に関係する人たちの努力はワースト1の汚名を返上し、かなりの回復を見せております。



(潮騒橋)



(潮騒橋から葛城山脈を望む)

絶滅危惧種のハクセンシオマネキがいたり、ウナギのシラスがたくさんいたり、スジアオノリなどが生え、河口すぐのところにはアマモさえ育っているのです。すごく汚れのある川では生活できない種類の生き物が存在し、近木川は汚れからかなり回復しているといえるのです。

貝塚には「木島」(以下歴史的な文章は「近木川ものがたり」中野義郎執筆による)という地域があります。その昔、樹木が島のように茂っていたところからそういわれたようです。

「宮木引く いづみの柚に 立つ民の やむときもなく こいわたるかも・・・」(万葉集から)

神社仏閣の材木である宮木は木積から木島のあたりの森林から伐採されたそうです。その巨木、銘木などが近木川を利用して運ばれ、河口の港(「神前の船息」僧行基の年譜による)から海上輸送され、木津川をさかのぼったようです。その作業に多くの人手が必要だったことから、「神前千軒」といわれ集落が栄えていたようでもあります。

後に「土佐日記」の作者紀貫之が2月1日このあたりを通過中、嵐などにあって4日避難したとあり、それがどうやら神前の泊ではないかと考察されています。そして、その4日間貫之は和歌を詠んだり、貝拾いをして退屈をしのいだとも記録されているようです。遊学館では冬の季節風の強い頃、「打ち上げられた貝拾い」を行っています。旧暦と今の暦は1ヶ月ほどの差がありますが、

本当に貝拾いには適しているようです。平成 19 年 12 月、この地域に木枯らし 1 号が吹きました。そのあくる日近木川河口には貝殻だけでなく、生貝もどっさり打ちあがっていました。偶然かもしれませんが近木川河口の特徴を現していると考えることが出来ます。近木川の流れる岩石を砕き細かな土砂に変えます。その土砂は風波の力で洗い晒されアサリなどの貝が打ちあがるのです。それが千年も繰り返されていたとすると大変愉快です。



(左岸)



(右岸)

近木川河口は貝の種類も豊富です。また、水鳥の宝庫でもあります。ヒドリカモなどは多いときは千羽を超えることがあります。

この文章を書きながら、改めて近木川河口を観察したくなりました。



(河口全景)